二人（ふたり）は黙つて對坐（むかひあ）つたまゝ一時間程待つたが何の沙汰も無かつた。

「君、僕はマダ晝飯も朝飯も食べて居ないんだから、早く濟（す）まして呉れないかネ、一寸署長に然（さ）う言つて呉れ給へ」

音無は堪（たま）り兼ねて斯う云つたが、「今に何とか言つて來ませうよ」と巡査は平氣で坐（すは）つて居た。

もう三時~~頃~~を過ぎた頃、音無は裏庭（うらには）の便所へ行つた。すると其の巡査は直ぐ後（うしろ）へ蹤（つ）い

別
6

ガラス使用

てきた。帰りに自分の隣室を覗いて見ると、其所（そこ）には田原の娚（をい）に當る東家（たうげ）が、頻りに鉛筆（えんぴつ）を動かしてゐた。夫れは退屈凌ぎ（たいくつしのぎ）に對手（あひて）の巡査の顔を寫生（しやせい）してゐるのであつた。東家（たうげ）は音無を見て、苦笑（くせう）したらチヨイと點頭（うなづ）いた。

音無はペコ〳〵に空（す）いた腹を抱へながら、「どうしたんだらうナ、早く濟（ま）して呉れゝば宜（い）いが……………」と繰返したら窓の外を眺めたり、硝子越（がらすご）しに事務室で物を書いてゐる巡査

二〇〇（神楽坂下山田製）

別 6

ガラス使用

を覗（のぞ）いたりして居たが、四時頃に表からドヤ〳〵と四五人の正服巡査が入（はい）つて来た。穢い此間始めて見た樽本刑事（たるもとけいじ）が「やア、えらかつた〳〵」と言ひ乍（なが）ら入つて来た。

「何所（どこ）へ行つて来たのだらう？」と思つて、少し首を左の方に伸（の）ばして見ると、入口の所に色の小黒い凛々（りゝ）しい顔に、クリ〳〵した眼を輝かしながら口を一文字に結んだ鳴野（なるの）が立つて居た。

「呀（おや）！鳴野君（なるのくん）も……！」吾輩は思はず小

中数二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

声で叫んだ。

「鳴野が来たの？」と巡査~~母~~が硝子戸の方を顧（ふり）眄（む）いた時、~~様~~最（も）早鳴野の姿は其所（そこ）に見えなかつた。

奴（やつ）と五時頃に音無は部長に伴（つ）れられて二階へ上つて行つた。其所（そこ）には四十恰好（かつかう）の薄（うす）い八字髯（ひげ）を生やした脊廣服（せびろふく）の男が四角な机を前にして坐（すわ）つてゐた。

「あなたが音無信次君ですか？」と言つて物（もの）優（やさ）しく住所原籍、職業を訊（き）いた。

[illegible]二〇（[illegible]下山田製）

別 6

200

「基督教（きりすとけう）は新教（しんけう）ですか旧教ですか。」

「新教です、長老派（プレスビテリアン）です。」

「田宮君とは御交際（ごかうさい）なさいますか。」

「ええ、大変親（した）しく交際（つきあ）つてゐます。」

「夫れは何（ど）んな御関係（ごくわんけい）で？」

「あの方（かた）の兄さんが、私の居ます教会を創（はじ）めて建てたのですから……」

「鳴野（なるの）君とも御親（おした）しいですか。」

「鳴野君は私が神学校に居る頃からの友人でございます。」

中藏二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別 6

問答はこれだけであつた。四時間も五時間も待たして置いての訊問（じんもん）だから、どんな意外（いぐわい）な疑質問が出るだらうかといふやうに、待構へて居た音無には少々呆氣（あつけ）なかつた。

「有難う、どうぞお帰り下さい！」と男は明瞭（はつきり）言つた。

音無は安心したやうな、不平なやうな心持で二階を降（お）りて来て、表へ出ようとすると、「おうい、音無君！」と後（うしろ）から大きな声で呼止められたのは樺本刑事であつた。

ガラス使用

「はア」と氣の無い返事をして振返ると、樽本は不思議さうな顔をして、「君、もう濟んだのかい？」と聞いた。

「濟んだんだよ、たつた五分間で……」

「高田檢事（たかたけんじ）が帰れつて言うたかい」

「帰れと言つたから帰つてるんだよ」

音無（おとなし）は稍（や）得意氣（とくいげ）に石段を降（ふ）りた。「へえんな皆は無いが、」と言はれたさうに樽本は音無の後姿（うしろすがた）を見詰めてゐた。

二行アキ

2・2

今號二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

　夕御飯（ゆふごはん）を濟（すま）して直ぐ音無は田原の所へ行つて見た。

「君所（きみところ）もやられたつてネ、牧師が家宅捜査（かたくさうさ）を受けるつて、世は澆季（すえ）だよ。」と言つて田原はハヽヽハと笑つた。

「何が何やら薩張（さつぱ）り見當（けんたう）が付かない。全体何を調（しら）べに來（き）たのでせう？」

「僕にも解らない、僕の所もやられたんだよ。」

（神楽坂下山田製）

204

「さうですか、矢張（やつぱ）り大審院から来たつて言ひましたか。」

「うん、何とかいふ判事が、そんな事を言つてゐた。大審院は可笑（をか）しいネ。」

話してゐる所へ東京（たうけい）が靴音（くつおと）高く入（はひ）つて来て、「ヤア〱、大變だつた。何だい、此の騒（さわ）ぎは。」と言つて上（あが）り框（かまち）へ腰を卸（おろ）した。

「お前の所もやられたのか？」

「今朝（けさ）私が漸（やつ）と御飯を食べようとして居る所へ加納（かなふ）とか何とかいふ警部が巡（じゆん）査を五六人

別
6
3

連れて来て、家宅捜査（かたくそうさ）をやると云ふんだらう。何の為だか知らないが、さア／＼何卒（どうぞ）ッて歓迎（くわんげい）したのサ。天井裏（てんじやうら）から床下（ゆかした）から事細（ことこま）かに調（しら）べたが、一番（いちばん）閉口（こうかう）したのは繪（ゑ）ノ具（ぐ）と鑵詰（くわんづめ）の説明だッた。單（たん）に繪ノ具だと言つても巡査は承知しないんだ、さも恐ろしい劇薬（げきやく）か、爆（ばく）發薬（はつやく）かのやうに、ビク／＼しながら、何といふ名で、どうするものかッて聞くんだらう。仕方（しかた）が無いから繪の具は一々（いちいち）捻（ひね）り出して色を見せてやつたが、困つたのは鑵詰だつたよ。

ガラス使用

マルがりだなと言つてもエッキスだと言つても一々中を開（あ）けて見ろと言ふんだから堪（たま）らない。さう一々開放された日には、皆（みん）な腐敗（ふはい）するからと言ふんで、一々レッテルを読んで説明したり、其のレッテルに小い牛（うし）の絵が描（か）いてあるので、内容（ないよう）が牛肉だと言ふ事を承認（しようにん）して貰つたりしたのだが、随分（ずゐぶん）滑稽（こつけい）だつたよ。家宅捜査学（かたくさうさがく）と言ふものを教へて貰はないと困るねエ、「これから先の警官には

東家（たうげ）は左（さ）も可笑しさうに笑つた。音無は東

別
6

家の方へ向直つて、

「あなたは最前（さいぜん）、巡査を写生（しやせい）して居たでせう。」と聞いた。

「うん、あんまり体屈（たいくつ）だから三ツばかりスケツチした。」東家（とうが）は靴（くつ）を脱（ぬ）いで座敷（ざしき）へ上（あが）り乍ら、「面白い事があつたんだよ、面白い事が」

「ふん、どんな事がの？」田宮は二コ〳〵笑つてゐた。

（自分の考案（かうあん）で）（あの應接室（おうせつしつ）の）

「一昨日だつた、僕は去年の冬描（ゑが）いたストー

ガラス使用

ヴを営生して居たら、妻が来て「既う六月にもなつてストーヴでもあるまいから、女中に片付けさせたら何う（ど）です」ッて言つたから、日本の女は夫れだから困（ま）る、何もストーヴと云ふものは冬ばかり必要ぢや無い。此町のやうに雨の多い所では、時々ストーヴを焚（た）いて空氣を乾燥（かんさう）させねばならん、さア何か持つて来い一燃し（ひともや）燃（もや）さう」ッて、突如（いきなり）僕は棚（たな）の上にあつた婦人雑誌を五六冊持つて来て、夫れを引破つてストーヴに捻ぢ込んで、夫れを燒りて了（しま）つ

ガラス使用

たのサ。なアに、平生から僕の嫌いな伯爵が何うしたとか、男爵（だんしやく）が斯うしたとかいふ、月（つき）並（なみ）な家庭小説を征伐（せいばつ）したのサ。僕は今の婦人雑誌を大嫌（だいきら）いだから、丁度（ちやうど）宜い時だと思って秦（しん）の始皇（しくわう）をやったのだが……」と云って東京（たうげ）はフヽヽと噴飯（ふきだ）した。

「どうしたんだい？ 夫れが……」田平は鼻（はな）を下（した）へ引張りながら東京（たうげ）の顔を覗（のぞ）き込んだ。

「所が今日の騒ぎだらう、多勢（おほぜい）やって来て家宅捜査（かたくさうさ）をしたが、最後（さいご）に警部が、いよい！

別 6

ガラス使用

くと其のストーヴの蓋を除つて見て、『あ、既（も）う、ちやーんと整理（せいり）してある！』つて言ふんですよ。」

『田舎も音無（おとなし）も思はずハ、、、と笑つた。『整理（せいり）してあるは宜（よ）かつたネエ』と音無は悦（えつ）に入（はい）つた。

『夫れからマダ斯（こ）んな事があつた』と東京（たうげ）は少し膝を乗出して、『僕は警察へ合意同行（がういどうかう）とかいふ奴（やつ）をやられて、四時間も検束（けんそく）された末で、何とかいふ検事が僕を二階へ呼上げて

中綴二〇（神楽坂下山田製）

別
6

ガラス使用

住所姓名を訊くんだろう。僕は思つたが、全体今朝から彼（あ）の人達は何をした？　多勢（おほぜい）の警部（ぶ）や巡査を僕（ぼく）の宅（うち）へ出張させて、隅（すみ）から隅（すみ）まで引掻廻（ひつかきまは）して調べさせて置いて、夫（そ）れから僕の住所姓名を訊（き）くって、天下に斯（こ）んな不合理があろうか、實際今更（いまさら）僕の住所や姓名を問はねば僕が誰だやら知らない位（くらゐ）なら、今朝（けさ）からの騒ぎは何（ど）うしたといふんだの？　何所（どこ）の何某の宅だやら知らないで盲目滅法（めくらめつぽふ）に僕の家（うち）を引掻廻したのだろうか。僕の住所も姓名も知つて僕の宅

別
6
3

を調べたのなら、今更何も僕の住所姓名を鹿（しか）爪（つめ）らしく訊（き）く必要は無いだらう？　判（わか）り切（き）つた事を訊（き）くのなら夫れは繁文縟禮（レツドリボン）だし、知らないで訊（き）くのなら、今朝（けさ）からの騒ぎに對して責任を帯びねばならないと斯う思つたネ。先づ甚（こん）様な知れ切つた事を問答するよりも、第一知らねばならない事は、僕を訊問（じんもん）する人が何所（どこ）の誰かと云ふ事だと僕は思つたネ。で、僕は鉛筆とノートブックを取出して、「然（さ）う仰しやる貴方（あなた）の御名前は？」と訊（き）いたのサ。「

半紙二〇（神楽坂下山田製）

二行アキ

2/13

「何搭車の名を訊いたのか？」と田宮は喉を軽擦（かす）るやうにして言つた。

「しかし僕の此の理論（りろん）は通用しなかつたよ。そして到頭（とうとう）悉皆（すつかり）族籍（ぞくせき）番地（ばんち）を言はされたネ。」

音無（おとなし）も東家（たうげ）もドツ！と声を揃（そろ）へて笑つた。

が、田宮は少し首を傾（かし）げて何ものか考へ込んで居るやうであつた。

音無は田宮の家を出て、教會の長老をして

中館二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

ゐる倉田の家へ行つた。門の所から敷石伝ひに奥まつた座敷の方へ行くと、玄関の所で倉田が『あ、来た来た、先生が来た。』と言つて此方を見て居た。~~椅子~~座敷では洋燈がカヽカンと燈つてゐた。

『先生がノこ。』と妻君の竹乃などが出て来て、

『とても、今日はエライ事をやつたはノこ。』

『お宅もやられましたか？』音無は豈夫と思つた倉田の宅まで家宅捜査の手が伸びたと聞いた時、意外に驚かされた。

別13-60

『やッと今片付いた所です』と倉田は廊下の所で衣類（きもの）の埃（ほこり）を拂いながら、『今朝（けさ）、私は教會の屋根を修繕（しゅうぜん）する事で、先生に御相談したい事があつて御宅へ參つたのですが、入口の戸を開けようとすると、巡査が立つて居て、入（はい）つちやア不可（いけ）ません！』ッて云ふんでせう。私は吃驚（びつくり）して『どうしたんですか』ッて聞いて見たが、巡査は何にも言つて呉れないので、多分赤痢（せきり）にでもなつたのかなアと思つて、大周章（おほあわて）に周章（あわ）てゝ田原さんの所へ行つ

別 1 6 3

ガラス使用

別13 6 3

て見たのです。所がドクトルさんの所も巡査が立つて居て入れて呉れないんです。どうした事だらうか、先生もドクトルさんも皆（みな）赤痢かコレラに罹つたのか知らと思つて、~~所~~家（うち）へ帰つて竹脇に甚説をして居る所へ、ドヤドヤと十人ばかりの巡査が入つて来たのです。何事か知ら？、と思つてると、部長さんが、「お宅（たく）には音無（おとなし）さんから何か預（あづか）つてるだらう？」ツて言ふんでせう。「いゝえ、何も預つて居ませんよ」と言つたが、最ろ其時巡査は皆

半截二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

な坐敷へ上つてゐろんでせう。』『兎に角一應調べるから……』ッて、さア夫れから家宅捜査が始まつたのです。所が私の所はこれで家宅捜査が二回目です。』

倉田は俄かに氣がついたやうに、『先ア何卒こちらへ……』と音無を一室に通した。

『ふん、私から預物ッて言ひましたか。』

『えエ、どうも警察から取調べを受けねばならぬやうなものを預つた覺えが無いので、何かの間違ひだらうと思ひましたが、多分

ガラス使用

別 1 6 3

私は部長さんに斯う言ひました。「どうぞ隅から隅まで調べ（おしら）て下さいませ、若し私の宅に、これは家庭教育上（かていきょういくじょう）不可い（いけな）といふものが、唯（ただ）の一つでも出て来たなら、如何（どん）な処分でも受けます」すると部長さんはニコ〳〵笑ひながら押入から戸棚から実に几帳面（きちょうめん）に調べ初めたのです。

四本当に父（とう）さんは、彼（あ）んな事を言うたんが、やはりこ、以前此家の爺の事で、家宅（かたく）捜索（そうさく）たら、捜査れらといふものをやられた時、父（とう）さん

二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

は中泉判事（なかいずみはんじ）さんの前で矢張り斯んな広言（こうげん）を切つたんぢやワノ、、」と、其時判事さんが、「本當に倉田さんのお宅（たく）は感心ぢや、何所（どこ）へ行ても大抵家宅捜査をしたら、博奕（ばくち）の道具（どうぐ）が出て来るか、變（へん）な繪（ゑ）が出るもんだが、お宅（たく）には夫れが無い！！」ツて、とツても感心して帰つたワノ、、」と、夫れで父さんは今度（こんど）も其手を遣（や）つたんぢやワノ、、」。

竹のは傍（そば）から容喙（くちばし）しながら、バケツの中の雑巾（ざふきん）を絞（しぼ）つて居た。

別 1 6 3

『今までもかゝつたのですか』と音無が聞いた時、倉田はニコ〱笑ひ乍ら、

『実は大掃除（おほさうじ）をやつたのです。』と云つた。

『家宅捜査の最中（さいちゆう）に？』

『然（さ）うです、實は此（こ）、家の二階には町内（ちやうない）の集會所の道具やら、種（いろ）んな物が山のやうに積んであるので、毎年々々清潔法の時大弱りなんです。所が今日の家宅捜査で、七八人の巡査が二階へ上（あが）つて一々迦羅倶陀（がらくた）を調べるんでせう、私は偶（ふ）と思ひ付いて、妻（さい）にバケツと雜巾（ざふきん）と

全紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

を持つて来させて、丁度空いた幸ひだから、巡査さんに「どうぞ此の筆筒を一寸頼みます……」「恐れ入りますが此の長持（なかもち）を一寸……」と云ふ風に手傳（てつだひ）つて貰つて、とうとう悉皆（すつかり）綺麗（きれい）に清潔法が出来ました。向ふは家宅捜査、こつちは清潔法、官民合同（くわんみんがつどう）……一擧（いつきよ）何とか云ふんですね、これが……」

倉田は呵々（からから）と笑つた。音無も東家（たうげ）に聞いた話を語つて、「ねエ、何の間違（まちが）ひから、斯んな事になつたんだらう？」と言つて居る時、

ガラス使用

一行アキ

玄関の所から、「先生、あつたワノし、あのたワノし……」と云ひながら竹~~田~~乃（たけの）が頻（しき）りに手招きをした。

「何かあつたのですの、」と音亀は玄関の所へ走り出た。田孚も續（つゞ）いて出て来た。

「御預り物はこれですよ。」と竹~~田~~乃（たけの）は新聞包（しんぶんづつみ）みを左の手に差上げて言つた。

「然（さ）うだ／＼、夫れだ。」と音亀は手を拍つて笑つた。

別 1 6 3

ガラス使用

前の晩音無は田舎の家を出ての帰途に倉田の家を訪問したのであつた。風呂に浴つて十二時頃まで話し込んで居て、帰らうとした時、妻さんの竹筒が、「先生、此大事の預り物は如何致しませう？」と言つた。音無は一寸ドキマギして「何にも預けて無い筈だが」と思つて居たが、十日程前に下駄を一足預けた事を想ひ出した。

「あゝあれですか、あれは大事のものですから、何卒大事に預つて置いて下さい。」と言

別1 6 3

ガラス使用

つた。下駄といふのはボール紙に薬液を塗布（ぬつ）て籐表擬ひ（とうおもてまが）にした二十四銭の安物であつた。音無は夫れを買つて尾田の所へ行つたが、夕立（ゆふだち）が降（ふ）つて来たので、夫れを穿りて履けて並らて高下駄を借りて穿いて帰つたのであつた。

「夫れぢやア確かに預かつて置きますワノ、」、お大事のまんぢやさか……」

竹箆（たけの）は大きな声で態とムキになつて出う言つたのであつた。

音亀は竹のの差出した下駄をくるんだ新聞包みを見てゐるうちに、偶(ふ)と前の晩に此家(こゝ)を出た時、門の所から大きな黒い影が権現の境内(けいだい)へ、すうーツと隠(かく)れて了(しま)つた事を思(おも)ひ出した。

音亀は礑(はた)と膝(ひざ)をたゝいて、「さうです、さうです、夫れに違ひない、お大事(だいじ)の預り物……と昨晩奥さんは仰(おつ)しやいましたネ。」

三人は新聞包を眺(なが)めながら一度に笑つた。

音亀の頭の中では、甚の黒い影が頻りに徂徠(そらい)した。

別
1
6
3

ガラス使用

226

二行アキ

音無が牧師館へ帰（かえ）つたのは最（も）う十時頃だつた。床（とこ）をのべて寝（ね）ようとして居る所へ、「音無君、音無君、」と戸を敲（たた）く者があつた。

「石塚君？」言いながら音無は洋燈（ランプ）を片手に出て来た。

「先（ま）ア開（あ）けて呉れ給へ、僕は今、田辺から帰つたんだ。」

「然（さ）うか、留守中に大変な事があつたよ。」

音無は掛金（かけがね）を外（はず）して置いて~~[illegible]~~、覗いて居る

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

「然うだってネ、田辺も大騒ぎだったよ。」

と言ひ乍ら覚也は勢よく硝子戸(がらすど)を引明けた。

「何事だらうネ。全体……」と音無は石塚(いしづか)が新しい意見でも齎(もたら)したか知れないと云ふやうな眼付(めつき)で問うた。

「薩張(さつぱ)り解(わか)らない、何でも事(こと)は中村、根本(ねもと)が新嘉坡(シンガポール)で企畫(たくら)んだ出版法違反(しゅっぱんはうゐはん)に関聯(くわんれん)してゐるらしい。どうやら日本全國で、同氏等の出版物を貰つた者は悉く捜査(さうさ)されたらしい、随(ずゐ)分(ぶん)大騒ぎだよ。」

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別1
60
3

「だッて、僕なんかは紙片一枚貰やアしないぢやないか。」

「ネエ、随分田邊でも大騒ぎだつたよ。」

「君の下宿を調（しら）べたと云ふ話だよ、昨日（きのふ）。」

「え？　僕の留守中（るすちゅう）に？」

「うん、夫れに就いて面白い話があるんだよ。」

「面白い話？　どんな事が……」覚也（かくや）は坐（ゐ）住（ずまひ）を直した。

「君の留守中に巡査が三人行つて、机から

半截二〇（神楽坂下山田製）

本箱から行李(かうり)から悉皆(すつかり)調べて二品押収(おうしう)して行つたものがあるさうだ。」

「押収(おうしう)？ 何を押収したんだらう？」

「一冊つは赤い表紙の書物だつたさうなが、一つは夫りやア奇抜(きばつ)なものだつたといふ話だ。」

「赤表紙の書物、は、アゝ、やられたナ。僕は赤穂初(あかほはじむ)君の「労働者(らうどうしや)の福音(ふくいん)」を置いてあつたんだ。田宮さんに貰つて……………しかし彼れは発売禁止になつただけだから差支へはないか

今一つの奇抜（きばつ）なものッてのは夫れは何だらう?」

「さ、夫れが面白いんだ、君の居子室（へや）には松に鶴の絵（え）を描（か）かれた襖（ふすま）の入（はい）つた袋戸棚（ふくろとだな）があるだらう?」

「うん、ある、しかし紙の中は鼠の糞（ふん）だらけで僕は開（あ）けた事が無い處。」

「所がだ、巡査先生其所（そこ）を引開（ひきあ）けると、紙（がん）袋（ぶくろ）に入れた薬品が奥の方に隠（かく）してあつたぢやないか。」

別13 60 3

「え？ 薬品（やくひん）が？」

「さうさ、君は隠した覚えが無い？」

「馬鹿な事を言へ、」

「馬鹿ぢやない、現在（げんざい）あつたから致様（しやう）がない、長手な紙袋（かみぶくろ）に入れた黄色（きいろ）い粉薬（こぐすり）があつたんだつてや」

「粉薬（こなぐすり）？ 何だらう？」

「巡査が夫れを引出して見た所、何だか解（書）らないと云ふので、前の杉木ち子薬種（ちか）屋の主人を呼んで来て鑑定（かんてい）させたが矢張り解らなか

別13 60 3

つたさうな。」

「ふゝん、何だらう？　黄色い粉薬？」と覚也（かくや）は頻りに首を傾（かし）げてゐた。

「実は斯（か）うなんだ。」と音無は可笑しさを堪（こら）へ〳〵語つた。「なあに、夫れはネ、去年の夏西國巡禮（さいこくじゆんれい）の道者（だうじや）が宿（とま）つた時、置忘（おきわす）れて行つた麦（むぎ）の粉（こ）なんだつて、初田餐粉（はつたいこ）だつて、多分雨にでも濡（ぬ）らしたのだらう、變な匂（にほ）ひがするので、女中が袋戸棚の中へ投（はふ）り込んで置いたのだつて、夫れが醗酵（はつかう）して妙な色になつてゐ

ガラス使用

別13-60

たもんだから、とうとう夫人を危険な薬品と
認め（みと）て押収（おうしう）して行つたんださうな。」

「何だ、馬鹿々々しい、女中（じよちう）がそんな話を
して居たかい。」

「うん、僕は其話を女中さんから聞いて本
当に可笑しかつたよ。其他（そのほか）、先ア（まあ）奇談怪説（きだんかいせつ）ば
つかりだよ。」

音無は車家（たろゲ）の話から倉田の下駄の話から一
々夫人を面白可笑しく語つた。

「家宅捜索の目的は其所（そこ）にあるのさ、総て

ガラス使用

別13
60
3

が笑（わら）話（はなし）で濟めば夫れ程結構な事は無いがやないか。だから家宅捜査なんて云ふ事は時々有つても宜（い）いんだよ。不意（ふい）に調べられて閉口するやうな家庭では困るぢやないか、では、笑ひ話の一つを御紹介しよう。今朝（けさ）斯んな事があつたのだよ、僕の宿（とま）つて居た宿の直ぐ隣りにね。己と覺也（かくや）は身体（からだ）を揺（ゆ）りながら、何でも鳴野君（なるのくん）と~~何~~何（どう）うかした關係からだと聞いたんだが、田邊で有名な藝妓が今朝寢込（ねごみ）を討（う）たれたんだよ。巡査が五人ばかり、村田四郎兵といふ

僕廿

ガラス使用

別13
60
3

検事に引率されて乗込んだが、まさか独り寝（ね）て臨検（りんけん）でもあるまいと、芸妓先生ぼんやりして居ると、片（かた）ッ端（ぱし）から鏡台（きやうだい）と云はず箪笥（たんす）と云はず調（しら）べられたんだらう。所が箪笥（たんす）の横（よこ）に小い桐の箱が……先（ま）ア紫のリボンで結られてでもあつたと思ひ給へ、夫れを一人（ひとり）の巡査が手を掛けたんだネ。すると芸妓先生、きやアツ！（一字下ゲ）と叫んで其の桐の箱を引奪（ひつたく）ツて確（しか）と抱（だ）きしめたんだ。素破（すは）こそ！と云ふので巡査が其の箱を捥（も）ぎ取らうとすると、

ガラス使用

236

「これぱっかりは、これぱっかりは、どん
車あったって見せられまへん……」と云っ
て其の箱を抱へ込んで了(しま)ったんだらう。さア
然(さ)う云ふ他人(ひと)に見せられないものが目的で踏
込んだ警官はん、うん然(さ)うかと云ふ譯(わけ)には行か
ない、隠(し)いて夫れを見ようとすると、
「そんなら、操車さんだけになら、見て貰
ひますわ。」と云ふったんださうな。
「よし〳〵、そんなら儂一人で見よう。」
「巡査はん達に次の室(へや)へ行て貰ひませう

別13 60 3

ガラス使用

寄別13-60-3

「これは、わたいが大事の〱もんやよつて……」

内では別室（べつしつ）で見せて呉はる」

こんな事で、村田検事と藝妓君とは別室へ閉籠（とぢこも）つたワケなんさ、所が其のコントラストが面白い、藝妓といふのは小萬（こまん）と云つて頗るの美人、検事といふのは夫れは謹厳な渋面作（じふめんづく）つた男、其の二人が對坐したまゝでは宜（よ）かつたが、偖て其の箱にはどんな大事な品が入（はい）つて居るかと思へば……君、何百通といふ艶書（えんしよ）

別13
60
3

ちやないか、小萬は町の財産家の息子で糸屋（や）といふ醫学士を愛して居たのださうなが、糸屋も小萬を落籍（らくせき）させようとまで思つて居たのが、家庭の都合で、とう／＼大阪の市へ行つて親の撰んだ女と結婚する事になつたといふ、所謂（いはゆる）世間普通（せけんふつう）の情話があつたといふ事サ。所が、糸屋が結婚前に、小萬から貰つた何色といふ手紙を小包にして、これまでの縁（えにし）と諦（あきら）めて呉れ、綺麗（きれい）サッパリと別れよう、此の手紙は今まで大事にしてあつたのだが、焼

中敷二〇（新榮堂下山田製）

別13
60
3

くのも心苦しい、と云つて持つて居ては尚更悲しい。だから思ひ切つて返しする。と云ふ意味の手紙を添へて返して来たんださうな。小菫は（二之日）泣いて〳〵泣通したさうなが、面白い事を考へたものだよ、君、小菫は又、何百といふ甚の手紙をチヤーンと整理（せいり）して、自分の出した手紙と甚の返事と、つまり往信返信を一々（いちいち）綴合（とぢあは）して、先（ま）ア立派な生きた小説を綴（つゞ）つたんだネ、そして、〝わたいと糸屋（いとや）さんとは、もう此世で連添（つれそ）ふ事が出来んのやよつて

半截二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

、せめて手紙だけなりと、夫婦にしてやらう〟ツて、つまり比翼状（ひよくじやう）を作つたんだネ。そして夫れを大事〳〵桐の箱に容（い）れて、毎日毎日暇（ひま）さへあれば夫れを読んでポロ〳〵涙を零（こぼ）して居たのだツてさ。で、小萬（こまん）は先づ大体（だいたい）自分と糸屋医学士（いとやいがくし）との関係をオロ〳〵声で物語つて、いよ〳〵本文に取かゝつた所、捨事が夫小を見ようとした所、どうして〳〵手（て）も觸（ふ）れさせないで、「一子（ひと）でよしあなたと私とが斯（か）うなつたのも、元（もと）はと云へば……」と一々

（神樂坂下山田製）

別13
60
3

読み初めたんださうな。村田検事も大いにアテられて「もういゝ、もう解つた。」と言つて宜い加減に切上げようとしたが、なかなか承知しない。

「わ、検事はん、あんたいが断ら言うてやつたのに、糸屋さんは断らない言うて来やはるんだつしやわ（ですもの）、とりやア糸屋さんが無理だすしやろ。」

と、いゝ調子で、村田検事は散々油を絞られて、頭を掻きながら帰つたツて、僕の出る前

ガラス使用

に宿の番さんが、甚の小藤を呼んで来て、大騒ぎサ、小藤は泣くやら笑ふやら……」

音無（おとなし）も覚世（かくや）も腹（はら）を抱（かか）へて笑い崩（くづ）れた。

一行アキ

最（も）う遅（おそ）いからといふので、覚世（かくや）は音無と枕を並べて寝（ね）た。翌朝十時頃（ごろ）まで寝て二人が十一時頃朝昼兼ねた御飯を食べて居る所へ鳴野（なるの）がひよつくり入つて来て、

「大騒ぎだつたネ、今朝（けさ）の大阪朝日に最（も）うちやアんと載つてるよ」と云つて畳の上に一枚の新聞を投げた。

今體二〇（神樂坂下山田製）

別13
60
3

ガラス使用

別13
60
3

293

音無は周章てゝ夫れを拾ひ上げて三面の下の方を見ると、其所には二号活字で新宮町の大捜査と題して一段程の通信が載つてゐた。其中程に三号活字で不穏（ふおん）なる牧師（ぼくし）といふ標題（みだし）で音無の事が十四五行書かれてあつた。音無はハヽヽと笑~~ひ乍ら~~「僕も一躍（いちやく）して有名になつたなア。」と言つてつた。

其日も其翌日も音無は田宮の家（うち）を訪問（はうもん）したが、何の異状（いじやう）も無く田宮は忙（いそが）しさうに診察（しんさつ）してゐた。

別13
60
3

三日目の朝音無（おとなし）は田宰の家（うち）を訪問して見ると、表の格子戸（かうしど）に「病氣デスカラ本日は診察（しんさつ）シマセン、薬ダケハアゲマス」と書いた紙が貼（は）られてあつた。

「どつかお悪（わる）いんですか？」少々不安を懷（いだ）きながら音無は内玄關の所から書齋の窓を覗（のぞ）き込むやうにした。

「音無君か、上り給へ。」奥の方から田宰

別13
60
3

が呼んだので、ツカ〳〵と上つて行つて見ると、別に病氣らしくも無く、机に對つて英譯（えいやく）小説を讀んで居たのであつた。

『御不快（ごふかい）なんですか、今日は……』

『少し頭（あたま）が悪いんで、』と言つたが、『いや、なアに別に大した事は無いんだが……』

『京阪（けいはん）の新聞には種（いろ）んな事を書いて居ますわ、私共には薩張（さつぱり）判（わか）りませんが……』

音無は話の端緒（いとぐち）を手繰（たぐ）り出さうとしたが、田宮は一向そんな事には興味の無いやうな顔

別13
60
3

付をして居たが、讀みかけた書物をパタッ！と閉ぢて、右の掌（てのひら）で其の表紙（ひょうし）を撫（な）で廻しながら、「吉異君、世の中の事は總て皆（みん）な必然（ひつぜん）だネ」と言った。

「偶然（ぐうぜん）は無いと仰しやるんですか」

「東家（たうげ）が自分の考案したストーヴを、應接（おうせつ）室（ま）の装飾（さうしょく）にして置いたと云ふ事に何の無理は無い、夫れから妻（かない）が既（も）う夏だから片付けようと言つたのも當然の事だ其時東家が平生から嫌~~杯~~つてゐた似（こ）報雜誌（まみさうし）と、其のストーヴへ投げ込んで燒いたと云ふ事にも不

ガラス使用

別13
60
3

思議はない。そこへ警官が何かが知らないが捜査に来て、其の灰を見た時、ちやアんと奇険な書類を焼払つて證據（しようこ）を煙滅（えんめつ）したと思ふの~~は~~も、警官としては実に當然の事なんだ。若し然（さ）う思はなかつたなら思はぬ方が間違つてゐる。其時、そんな馬鹿な事は無い、実際（じつさい）は斯（か）うだと云つた所で、夫りやア人間同士の間には通用しない辯解（べんくわい）だ、東家（れうげ）も其の妻（かない）も警官も三人~~あ~~は三人ながら、當然（れうぜん）為すべき事を為したので、夫れが為に東家（れうげ）が一生如何（どん）な苦痛を背負

半截二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

はされようと、夫れは皆な当地の結果だと思はねばならない。然うさ、僕だつて矢張りさうだ。僕は製材会社のストライキの時確かに黒幕（くろまく）になつた。そして其の結末は然んな事になつて了（しま）つたが、取りやうによつては、どうにでも解釈されるんだ。或るの家宅捜査の時に、一人の巡査が（僕の）本箱の後（うしろ）から一枚の葉書を拾ひ出して来た。夫れは以前或る家で書生をして居た根本（ねもと）が、新嘉坡（シンガポール）に居る中村君の所へ行く事になつて、三輪崎から乗船する時、然所（あすこ）

（神楽坂下山田製）

別13
60
3

の艀宿からよこした葉書だつた。其の葉書には簡單に、

「長々お厄介（やつかい）になりました。先生の所に居た數ヶ月は暴風雨（あらし）の前の靜（しづ）けさであつた。彼地（あつち）へ行つたら、うんとやります！」

と斯（こ）れだけ書いてあつた。夫れは~~權~~あの根本（ねもと）が僕の所で毎日ごろごろと寢（ね）こけて遊んでばかり居たが、いよいよ決心して新嘉坡（しんがぽーる）の護謨林（ごむばやし）で働かうと云ふ氣になつた時の、僞らない感

[illegible]二〇（[illegible]下山田製）

別13
60
3

鞄ではないか。しかし今刻の騒ぎに根本も加はつてゐるらしいが、『暴風雨（あらし）の前の静（しづ）けさ』だとか、『うんとやります！』とかいふやうな言葉も、眠りやうでは如何（どう）にでも解釈が出来る。殊に僕は医者で、根本は薬局生だ、種々（いろ）な薬の調合（てうごう）も問はるれば、正直に教へてもやつた。薬局に居た根本が（わざと）出立の際に、其の荷物へ何を容（い）れて行つたか知れたものでも無い。だから僕は思ふ、あの葉書一枚が或は僕の一身に、どんな祟（たゝり）をするかも知れない。しかし、また仮令（たとへ）

別13
60
3

どんな災難が降つて来た所で、夫れは誰が悪いのでも何でもない。夫れが為に艱難が僕の身に及んで来るとすれば、僕は甘んじて其の艱難を受けねばならない。夫れは何とした所で、何う狂（くる）つた所で其の飲むべき盃は矢張り飲まねばならないんだから……！」

「つまり、諦（あきら）めるんですね、然（え）んなに……」

「うん、諦めると言つても宜い、決心すると言つても宜い、自ら進んで其の運命（えらい）のまゝになるのが自由だと言つても宜い。僕なんかは今まで、

ガラス使用

別13
60
3

自分の浅い智慧と短い経験で、一つの主義主張を作つて、其の自分の立てた主義なり主張なりを振翳（ふりかざ）して、一寸（ちよつと）でも夫れに適（かな）はないものは皆な蛇蝎（だかつ）視して軽蔑（けいべつ）して来たが、夫れは全然間違つてゐた。世の中の事は、そんな簡（かん）単（たん）なものぢやア無い。我々は真理だの主義だのと言つて、却（かへ）つて世を乱したり人を苦しめたりする事があるかも知れない、夫れかと言つて世るから悪党（あくたう）のやうに忌嫌（いみきら）はれて居る男が、どんなに善事をして居るかも知れないん

甲数二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

だ。兎ん角我々は、もつと深く考へなければ不可（いけな）い、だから僕は一旦精神上の無産階級（むさんかいきふ）になつてしまつて、新（あらた）に人生観（じんせいくわん）を築きあげようと思ふ。夫れには矢張り今までのやうに、時計や聴診器（ちやうしんき）で人を嚇（おど）かして居ては駄目だと思ふ。もう僕は経済学（けいざいがく）にも社会学（しやくわいがく）にも哲学（てつがく）にも又本職の醫業（いげふ）にも飽（あき）~~き~~が来た。皆（みん）な詰らないものだと思ひ出した。のみならず近頃は斯（か）うして畳の上で旨（うま）い物を食つて安楽に活きて居るのが恐ろしくなつて来た。」

ガラス使用

別13
60
3

田宮は斯う言つて、堪へ切れないやうな苦痛の色を面（おもて）に表はして俯向（うつむ）いてしまつた。

「では、あなたには最（も）う敵といふものがありませんですか？」音無は取りつく島が無かつたので、斯んな不得要領（ふとくえうれう）な事を言つて見（み）た。

「敵？、そんなものは無い、一切衆生（いつさいしゆじやう）は我が子なり！」といふのは無理だらう、敵を愛せよといふ教へはマダ深さが足りない、敵なんていふものを認（みと）めるうちは駄目（だめ）だ。」

田宮は然（さ）う言つて、凝然（ぎつ）と音無の顔を見て

ガラス使用

別 13 60 3

居たが、ホロリと涙を膝の上に落した。音無も過る夜の物語りを憶（おも）ひ出して「ハウ〳〵」と熱い涙を零（こぼ）しながら俯（うつ）向いてしまった。

一行アキ

其晩であった、音無は始めて吊（つ）した蚊帳（かや）の中で「ク公爵の幼年時代」を讀んで居ると、勝手口の戸をコツ〳〵と敲く者があった。

「何誰（どなた）です？」と言って高窓の所へ行って見ると、窓の下に立ってゐるのは確（たし）かに田泉であった。

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

「田京さんぢやありませんか。」と音無は恐ろしい物でも観（み）るやうに窃（えつ）と障子窓を引開けた。

「今朝程は失敗した。」と言つて、田京は音無の顔を見上げながら、「君、甚所（えと）の運動場までも行かうぢやないか。」

「参りませう。」と音無は寝巻のまし勝手口から出て行つた。そして二人は直ぐ裏手の小学校の運動場へ出て行つた。

「君、いよ〱実行する時が来たよ。」

別13
60
3

「旧家さんぢやありませんか」と音無は尖ろしい物でも観（み）るやうに、窃（そつ）と硝子窓を引開けた。

「今朝程は失敬しました」と言つて旧家は月明りに音無の顔を見上げて、「君、いよいよ実行する時が来たよ。」

「いよいよ先達て仰しやつた御意見を？、」

「あんな騒動（さうどう）のあつた後（あと）で、出て行くのは少々立後（たちおく）れの気味で不味（まづ）いが、夫れも仕方が無い、先（ま）ア行く所へ行かう！」

全紙二〇（新案登録山田製）

ガラス使用

別13
60
3

田孫は土塀に添うて自分の影を踏みながら、しんみりした声で斯(か)う言った。

「では、喝(かつ)てお話しすお意見を、いよ〱御実行なさいますのですか。」

「少々立後(たちをく)れた、もう十日も早く決行する筈であったが、矢張(やっぱ)り凡人(ぼんじん)だからナ、いざとなると、どうも決行出来ないもんだ。あんな騒動のあとで出て行くのは不味(まず)いけれども仕方ない。吉岡の奴(やつ)は僕の家出(いへで)と今度の騒動とを一つにして考へるかも知れないが、どうでも言ひ

別13
60
3

たいやうに言はせま~~す~~。[illegible]それ確かに今夜の騒ぎが僕の決心を速めたんだから、全く関係が悪いとも言へないサ。」

「では、もう奥様にもお許しなさいましたのですか。」

「言やしない。しかし僕の常平生（つねへいぜい）の行動を知つてる者（あれ）は、僕が突然（とつぜん）此の日本の地を離れて了（しま）つた所で、夫りやア嘻くには嘆くだらうが、幾分か普通の女とは異（こと）なつた考へ方をするだらうと思ふ。」

別 13 60 3

『では、鬼様に何所へ行くと仰しゃるのですか。』

『一寸東京まで、中村や根本（ねもと）に面会（めんかい）に行くと言つて……………』

『入獄してる中村さん達を御（お）見舞（みま）ひに行らっしゃると仰しゃれば、御心配なさるでせうの？鬼様は………』

『しかしネ、あんまり何でも悪いやうな事を言つて安心させて置いても却（かへ）つて可哀さうだから、都合にすれば自分も何かの引懸りで

中藏二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別
13
60
3

一二ケ月~~後~~未来に捲り込まれるかも知れない……位な事は仄（ほの）めかしてあるんだ。」

「夫れは奥様がお可哀相（かあいさう）です。」

「なアに、此の世の中の親子夫婦兄弟朋友は皆（みん）な遠（とほ）かれ速（はや）かれバラ／＼になつて了（しま）ふんぢやないか。千年も万年も永恒（えいかう）恒不窮（ふきゆう）に固く結縁（けつえん）されて居るやうに思ふのは人情だが、どうして／＼、運命の力は無慈悲で残酷（さんこく）だ。思はぬ時に思はぬ出来事があつて、泣いても叫んでも皆（みん）な個々別々に引離して底（そこ）の知れない

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

闇暗の穴に投げ込まれて了ふのサ。僕の身体には最（も）う其の運命の鋭（するど）い爪が、がツしりと打込まれてゐる。僕は偉（えら）さうに今後の事を自分で決断するやうに口では言つてるが、これは僕の自由意志でも何でも無いんだ。恐ろしい〳〵運命の爪が僕を攫（ひつさら）つて行くんだ。夫りやア君、僕だつて此儘（このまゝ）安楽に此所（こゝ）に居たいサ。しかし夫れは出来ない。僕は可愛い妻子にも、友人にも故郷にも此の由来の國にも永劫（えいがう）に訣（わか）れるのだらうか？、空想的な恐怖に脅（をびや）かさ

別13
60
3

れて居るのかも知れない、悪霊に取憑れて居るのかも知れない。斯（か）うした運命を擔（にな）つた僕と夫婦になつた妻（つま）は可哀相だが……先（ま）ァ仕方が無い。」

「では何時（いつ）お出かけなさいます？」

「明朝疾（はや）く……で、僕は未練（みれん）なやうだが三輪崎（みわさき）まで妻（つま）を伴（つ）れて行く、そして夫れとなく妻に得心（とくしん）させて置かうと思ふ……」

「さうですか」と言つたきり音無は黙つて田泉の黒い影を見詰めて居た。地に映（うつ）る

中饒二〇（神樂坂下山田製）

別 13 60 3

『しかし君、或は三ケ月後にひよつくり帰つて来るかも知れず、~~又~~夫れとも二年三年後になるかも知れず……最（も）も今晩ッきり君とも永遠（えいえん）に會（あ）はないかも知れず………』

中空（ちゆうくう）に鏡のやうにやうに懸（か）つてゐる月を振（ふり）仰（あふ）いだ田平の眼（め）には涙が光つてゐた。

『こんな事をお尋ねするのは甚だ失禮ですが……』と言葉は少しく躊躇（ちゆうちよ）して、『中村さん、や根本（ねもと）さんが、何（ど）んな事をなすつたのか知れませんが、世間の人達が何だか企畫（たくら）みなさ

（神楽坂下山田製）

別 13 60 3

つれ筆深地へ向けて出発なさるといふ事に就いては、何だか私にも變（へん）に思はれないでも無いので……。正

回夫れは尤もな尋ねだ。しかし僕は行先を新嘉坡（シンガポール）と決（き）めた譯（わけ）かやア無い。印度（いんど）何（なん）もへ行くやらモスクワ辺（へん）へ行くやら、僕かはかり知つて居るエスペラント書を枕に世界中のエスペランチストを尋ねて廻るやら、行先は殆ど確定（かくてい）して居（事と）ないのだから……そして君、僕があの中村や根本等の事件と関係して居る

中號二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別 13
60
3

ならうといふ心配は決してしないで下さい。夫りやア大丈夫だから、僕もさうまで空想家にはなり得ないんだからね。万々一僕と伊藤との事に何等かの引懸り（ひつかゝ）が。しかし出来るとしても、夫れは丁度君の下駄や東京（ひつゲ）のストーヴや石塚君の麦の粕と同じ事だと思つて呉れ給へ。』と言つて、『さう〳〵石塚君と云へば、彼の男の将来を宜しく頼むよ、新聞記者も永くは続かないだらうが、万事（かない）君が相談（さうだん）相手（あいて）にな（僕の）つてやつて呉れ給へ。家内の事は親類中が誰

半紙二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別 13 60 3

一行アキ

一人世話をしないでも、妻は妻一人で切り抜けて行くだけの常氣は與へてあるから……！ちやア失敬する、明朝は庭りから最（も）うお眼に~~置~~掛らないで行く、行く先々（さき〴〵）からは時折の便りをするから、さやうなら！改

田宮は手を伸（のば）して音無と堅（かた）く握手（あくしゅ）した。田宮の手は冷たかつた。

田宮は杉の生垣（いけがき）に沿（そ）うて表の方へサッサと出て行つた。音無は餘程追かけて行つて、今一言だけ何だか言つて置かうと思つて駈（か）け出さ

ガラス使用

別13
60
3

2687

二行アキ

たが、どうしたものか其の勇氣が出なかつた。

「いよ〱實行するのかナ……」と呟（ぶや）きながら硝子戸（からすど）を閉めて床に入つた音奥は、靜（じつ）と眼を閉ぢてみると、彼が此町へ來て初めて田舎に住つた時から今日までの田舎の生活の轉變（てんかい）がフイルムを展開するやうに代る〲心に泛（うか）んで來た。

あの頃の田舎は極端（きよくたん）な階級鬪爭（かいきふとうさう）を夢想（むさう）して居た。富豪から往診を頼みに來た時は往診料を先拂（さきばらひ）にしなけりや嫌（いや）だ！」と言つて撥（は）ね

寄別 13 60 3

付けて置いて、車借も薬價（さしね）も呉れる氣遣いの無い貧乏人の所へは、何を描いても直ぐ駈けつけてやるといふやうな術師は、（つたのは夫れば）資本家に對する一種の反撥（はんぱつしも）心から來たものだ（のであつたらう）。裏庭にあつた大きな梅の樹を斫倒（きりたふ）して薪（まき）にしたのも其頃の事であつた。

「こんな立派な古木（こぼく）を、勿体（もつたい）ないぢやありませんか。」と言つた時、「僕は此頃株（かぶ）とか資（し）本（ほん）とかいふ言葉が嫌（いや）で嫌で堪（たま）らない。毎日毎朝此の梅の株（かぶ）を見る度に株といふ言葉を聯想（れんそう）

中段二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

するのが嫌(いや)だから祈つてゐつた」と答へた言葉が今耳に残つて居る。

何かの説の序(ついで)に聖書の中にある「汝の敵を愛せよ」といふ文句(もんく)に就いて祈り云ふ事を言つたのであつた。

「汝の敵を愛せよといふ事は無理に相違(さうゐ)ない。神は善き木にも悪しき木にも等(ひと)しく雨を降(ふ)らす、甚の日を善人にも悪人にも照(てら)す。しかし夫れは神に於て始めて出来る事であつて、我々人間に、マダ善悪(ぜんあく)正邪(せいじや)といふやうな區

別13
60
3

別の存在する間は、何所までも悪を悪として之に敵し、敵と敵としてこれを憎まねばならない。悪む（にく）以上は其人の霊魂だけを悪んで（にく）身体を悪まないという理由（わけ）には行かない。躯を憎んで其人を憎まずというのは一種の空想である。我々は最も（も）心と物とを二つに分けて考へる事は出来ない。随って（したが）其敵を悪む（にく）に當つては、勢い（いきほひ）其人の身体（からだ）をも悪み、尚進んでは其人の所有物や事業にも害を及ぼすやうな事になるのは止むを得ない事である。坊主（ばうず）憎け（にく）

二〇〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別 13 60 3

りや袈裟（けさ）まで憎いといつたのは一面の道理である。僕もこれまで多少成功主義（せいかうしゆぎ）の生涯（せうがい）も送つた。悔悟（くわいご）の時代もあつた。無抵抗主義（むていかうしゆぎ）に心を傾（かたむ）けた事もあつて、人と争ふ事を絶対の罪悪である、敵を悪む事は極端（きよくたん）に下劣（げれつ）な事であるとも考へて見たが、今から見れば、そんな事は皆な未熟（みじゆく）な信仰であつたと思ふ。我々が人間である限りは、何所（どこ）までも罪悪との奮闘（ふんとう）を続けねばならぬ。悪人を敵として之を撃し て行かねばならぬといふ事に氣がついた。斯

中聲二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別 13
60
3

一字下げ

うして我々が敵を悪み悪と戦ふ事によつてのみ、社会人類の幸福が増進（ざうしん）するのである。正宗~~[illegible]~~其時自分は随分~~[illegible]~~其の議論に対して~~随分~~猛烈に反抗してトルストイの無抵抗主義を主張したのであつた。~~其時自分は、~~只夫れ、其通りに無抵抗（むていかう）を標榜（へうぼう）しながら、矢張り猛烈（もうれつ）に抵抗して来るぢやないか。と言つて居~~[illegible]~~

其頃の田舎の家（うち）には玄関番とも食客（ゐさうらふ）とも附かない青年が始終五六人ゴロ〱して居た。

ガラス使用

別 13 60 3

別行

大抵東京や大阪から流れて来たもので相當教育もあるらしかつたが、家事や薬局の手傳ひをするでも無く、眞面目（まじめ）に勉強する容子（ようす）も見えなかつた。何（ど）ういふ縁故（えんこ）があるのか、怎（ど）ういふ意（つもり）で置くのか、聞いても見なかつたが、何しろ医者の書生らしくない青年が、能く頼つて来ては表坐敷の二階で暢氣（のんき）な顔をして、ノツソリしてゐた。

~~其頃は~~二年前の春であつた、泉州の堺~~其塲~~濱の新地であつた、德田といふ新聞記者が、東都の方へ轉任する送別會の席上で、春葉が何

ガラス使用

別 13 60 3

2?

《田舎の妻》

で開いた牧師會へ出席した時、田舎から頼まれて、貞子（ていこ）と其の妹の勝代（かつよ）と、夫れから漸（やっ）と三歳に明けた太た郎（やたらう）とを伴（つ）れて勝浦から紀州丸へ乗込んで和歌浦まで（鋸山）行ったのであった。四人がボーイに案内されて二等室へ入（はい）って行くと、其所（そこ）に色の黒い大きな男が胡坐（あぐら）をかいて坐って居て、

「やア、奥さん、何所への。」と言った。

「一寸名古屋まで……。」と貞子（ていこ）は顔の筋肉（きんにく）一つをも動かさずにブッキラボウに答へただけで

中銀二〇（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別 13 60 3

~~眠ることも叶へ~~た。しかし男は大層親切らしく船中~~で~~何くれとなく~~親切な~~世話をした。無聊氣な丈太郎は其男に抱かれて甲板（デツキ）へ出て行つたり、菓子を買つて貰つたりして喜んで居た。~~無~~其男~~を~~は兎角平生田舎に診察（しんさつ）でもして貰（もら）ふ~~れたら~~懇意（こんい）な人位に思つてゐたが、和歌浦へ上陸した時、芦邊屋（あしやや）の二階で貞子（てこ）は眉根（まゆね）に皺（しは）を寄（よ）せながら斯（こ）んな事を言つたのであつた。

「音無（おとなし）さん、~~私~~今日（けふ）は本當に不快でしたワ、私はあの男は橋本つて刑事（けいじ）なんですよ。~~あなたも~~御

迷信家つて御笑ひなさるか知れませんが、

ガラス使用

別13
60
3

御承知の通り、宅（たく）は平生から~~過激~~な事ばかり言ってるでせう。私は甘子を宏子と~~あの橋本~~あの刑事が丈太郎を抱（だ）いたり甲板（デッキ）へ伴（つ）れて行ったりして呉れるのを見ました時、何だか三年五年向うの事を取越して考へて見ましたの……万一にも宅が何かの間違ひで~~の事があったす~~遠い所の監獄（かんごく）へでも入れられるやうな事があって、甚時牧師である貴方（あなた）~~伴れられて……~~刑事に尾行（び）せられながら船に乗って行く……と私はそんな事を想（おも）ふと本當にぞーっと身が縮（しま）るやうに、不快（ふゆかい）でしたわ。」

「そんな馬鹿な事を！」と云って甘は廿時、唯ハヽヽヽと笑ったのであつ

ガラス使用

別13
60
3

たが、今夜の旧友の言葉から推して考へると、甚だの貞子（ていこ）の心根（こころね）が今になつて始めて明瞭（はつきり）判（わか）つて来た。貞子（ていこ）には既（も）う二年前から今夜の悲しい出来事を豫感（よかん）して居たのだ。

斯（か）う思つた時音無（おとなし）の心の底には其の當時の事が明瞭（はつきり）とパノラマの様に見えて来た。勝浦へ行く途々（みちみち）俥（くるま）の上から眺（なが）めた白菊（しらぎく）の濱（はま）の浪は絵（ゑ）のやうに美しかつた。~~浪が舷を高めて~~船室へ降（お）りて行く階段（かいだん）の真鍮（しんちゆう）の欄干（てすり）は綺麗（きれい）に磨（みが）かれてあつた。前歯（まへば）の一本缺（か）けたボ

半紙二〇（神楽坂下山田製）

別 13 60 3

ーイがコーヒを持つて来た。三つになる丈太郎~~坊~~は、船がグーッと浪の中へ入つて行く時、四チヤ〳〵さん＝おツ母さんの事＝此の家は何所へ降りて行くんならのウ。と言つた。丈太郎~~坊~~は船と家との區別を知らなかつたのである。船の搖れるのを家が坂を降りて行くと思つたのだらう？

いつのまにか音無の眼の前には、漫々とした海が見えて来た、雨が降り風が吹き初めた。山のやうな怒濤が紀州丸を木ノ葉~~如~~のやうに

（神樂坂下山田製）二〇〇

別13
60
3

2-870

翻弄（ほんろう）し初（はじ）めた。

音無は物（もの）の怪（け）に魘（うな）されたやうに蒲團の端（はし）を両手にグーッと握りしめて、身体を屈めた。

四　あの紀州丸、（自分達の乗って行った）あの紀州丸は（先方から揺れ）沈没（ちんぼつ）したんだ。食卓の前に叮嚀（ていねい）に挨拶（あいさつ）に出て来た事務長も、前菜の駈（か）けたボーイも皆（みん）な死（し）んで了（しま）つたのだ。製材会社で働いて居た小山（こやま）も……彼の弱々しい小山が裁判所へ喚（よ）び出されて行く途中で……山

音無（おとなし）はガバと撥（は）ね起きて、蒲團（ふとん）の上に坐つ

別13
60
3

た。「タトヒ罪業ハ深重ナリトモカナラズ弥陀如来（にょらい）ハスクヒマシマスべし」と書いた小形（こがた）の和本（わほん）が鳴野（なるの）の手と一緒（いつしよ）に壁の所へ見えるやうに思った。

恐ろしい〳〵運命の爪が僕を取攫（ひつさら）って行くんだ……空想的な恐怖に脅（おびや）かされて居るのかも知れない……悪霊（あくれい）に取憑（とりつ）かれて居るのかも知れない……と唸ッタ今言った田宰の言葉はひし〳〵と音無（おとなし）の胸（むね）を締（し）めつけた。

音無は又た蒲団（ふとん）を引被（ひつかぶ）って寝（ね）て見たが、何

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

となく悲しくなつて来たので、今度は心を静めて、そつと半身を起して黙禱し初(はじ)めた。五分十分唯主(しよ)よ〳〵と祈つて居たが、神経が餘程沈静して来た時、偶(ふ)と一ケ月前に晩稚樓(なんがらう)で枯木(かれき)のやうに極めて自然に永眠した松窓斎(まつさうさい)の安らかな死面(しにかほ)が歴然(れきぜん)と眼底(かんてい)に浮んで来た。長い間不幸な病人の慰安者(ゐあんしや)となり看護人となつて死水(しにみづ)を取つてからは、世に棄てられた憐れな乞食の友となつて、天涯に寄邊(よるべ)の無い流離子(さすらひご)らを温(あつ)かい愛の懐(ふところ)に抱(いだ)いて慰めつゝ七

別13
60
3

十六年の生涯を締[illegible]

終つた渠れ松秀節の死面（しにがほ）は真に崇高い聖者の面影（おもかげ）があつた。

危篤（きとく）だと聞いて音無と一緒（いつしよ）に駆（か）け付けた田宮は「嗚呼、何といふ尊い美しさであらう！」と思はず感嘆して叫んだのであつた。両手を帯に挟んだまゝ直立して松秀節の死面を眤（ぢつ）と凝視（みつ）めてゐた時の田宮の顔には言ひ知れない感激（かんげき）が溢（あふ）れてゐた。

学問も智慧（ちえ）も才能（はたらき）も無い松秀が、善人といふ性質を唯一の資本として、南洋から印度、

別13
60
3

南北米大陸を流れ渡つた末が、縁も由緒も無い熊野の浦へ落着（おちつ）いて、餘生を病人と乞食とに捧（さゝ）げたといふ此の眼前の事実がドレ程田宮の心を感激（かんげき）せしめたであらう。

「アレだ！」

音無は思はず膝（ひざ）を打いて又た眼を閉（と）ぢた。神々（かうごう）しい杉房の死面（しにがほ）と、凝然（ちつ）と夫れを見詰めて居る田宮の姿（すがた）とがアリアリと眼前（がんせん）に浮（うか）んで来た。

「さうだ！　田宮はこれまで冷静（れいせい）な哲学（てつがく）と

字數二〇〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

火のやうな熱情との激しい戰鬪をドレほど長く續けて來たらう？、此の精神的苦闘が、然れど如何な煩悶を與へたか、又た何んな光明の一路を照らしたかは知らないが、最後の決心をした機緣となつたのは確かに松魔の美しい死であつた。屹度然うだ！

明日の朝、然れば此地を去る！　可愛い妻子を殘して去る！　去つて何所へ行く？、往く日も來る月も、所變れば風も變る長い〳〵旅路、然の過激な革命家の意氣も、貧者の友

別
13
60
3

であつた救世者（きゅうせいしゃ）の熱心も全くお忘れたやうに普通（ふつう）の平凡（へいぼん）な一善人（いちぜんにん）として、晨（あした）には哲学者の門を敲（たた）き夕（ゆうべ）には蛮人（ばんじん）の群（むれ）を訪（と）ひつゝ、雲（くも）を送り山を迎へた末、畢波羅樹下（ひっぱらじゅか）の軟（やはら）かい青草（あおくさ）を褥（しとね）として枯槁（ここう）した形容（すがた）を横へながら眠（ねむ）るが如き大往生をして、袒裸（たんら）の土人に圍繞（ゐねう）されて、「嗚呼（ああ）、平和なる涅槃（ねはん）よ！」と合掌禮拜（がっしょうらいはい）されるが恐らく彼れ釋尊（しゃくせん）の大本願（だいほんぐわん）であらう！正と左さま右（かう）さま因果の生涯を思ひ悩（なや）んだ果が此の空想の光景を彷彿（はうふつ）した時、吾輩の腰から

別13
60
3

前れは累しも無い美しい光景が展開された。不可思議な音楽（おんがく）さへ天の一方から聞えて来るのであつた。

字數二〇（靜榮堂下山田製）

ガラス使用

別
13
60
3

諸井

宿命後篇（五）

哀別

七枚

通計八百五十九枚

中綴二〇（神樂坂下山田製）

ガラス使用

別 13 60 3

家別

「お宅（おたく）ですか。」と音無は白々（しらじら）しく玄関先から声をかけた。

「あ、音無さん？」と諒峯宅の襖（ふすま）を開けて半（なか）ば顔を見せたのは貞子（ていこ）であつた。

「どちらかへ行らつしやいましたか。」と音無は重ねて自己（じこ）を抑きたら問うた。

「先（ま）アお上り下さいまし、私、今お伺ひしようかと~~妻~~思つてゐた所です。」

（神楽坂下山田製）

別13
60
3

「然うですか……」と音無（おとなし）は最（も）う胸を轟（とどろ）か
すのであつた。

二人（ふたり）は診察室の小い卓子（テーブル）を中に対坐（むかひあ）つた。

「音無（おとなし）さん、宅（たく）は今朝（けさ）東京の方へ参りまし
た、私、三輪崎（みわさき）まで送つて行きましたが……」

見る／＼貞子（ていこ）の睫（まつげ）は涙に濡（ぬ）れた。音無は最
う堪（た）へ切れなくつて、出来る事なら其場（そのば）を逃
げ出したく思つた。

「東京へ行くと仰（おつ）しやいましたか……」

「えエ、中村さんや根本（ねもと）さんに面会に行く

卓藁二〇（神楽坂下山田製）

別13
60
3

のだと言ひましたが、、不思議なんですよ、私共が紀の三輪崎（みわさき）の片岡屋（かたをかや）の二階へ上（あが）つて行くと、其所（そこ）には~~既う、ちやんと~~和歌山へ行くのだとか言つて標本刑事（ひやうもとけいじ）と署（しよ）長（ちやう）さんが行つて居まして……宅（たく）に一寸（ちよつと）面会（めんくわい）したいと仰（おつ）しやるんでせう。宅（たく）は平気で標本さんのお部屋（へや）へ入（はい）つて行きましたが、四五分間何だか密々（こそこそ）話して出て来ました。そして宅は大層打悄（うちしを）れて種々（いろいろ）な事を仰（おつ）しやるんでせう……哲子（てつこ）や丈太郎（ぢやうたらう）の事、大木から私の身の上の事、全（まる）で最（も）う二度と会（あ）はれない、長（なが）い〜〜

[illegible]二〇（神楽坂下山田製）

別 13 60 3

訪れでもするやうに……夫れから……これは迷信だと御笑ひなさるか知れませんか、私、本當（ほんたう）に氣味（きみ）の悪い幻（まぼろし）を見たのですよ」貞子（ていこ）は色を蒼（あを）くして一寸（ちよつと）首（くび）を竦（すく）めた。音無はギョッとして、

「幻（まぼろし）？ どんな事です？」

「本當に奇態（きたい）なんですワ、最（も）う船が着いたので、宅が偶（ふつ）と立たうとした時、羽織（はおり）の下に、宅の羽織の下に……」貞子（ていこ）はブル／＼と身を慄（ふる）はした。

別13
60
3

「羽織の下に？、何(ど)うしたんですの？」正

「三勝半七(さんかつはんしち)の芝居(しばゐ)で見るあの舅(しうと)のやうに、確(たし)かに……確(たし)かに宅(たく)は繩(なは)で縛(しば)られてゐました。夫れは幻(まぼろし)でせう……幻でせうが私の眼(め)には確かに然(さ)う見えました。夫れから署長さんも棒本刑事も、偶然(ぐうぜん)あの宿で落合つたに相違(さうゐ)ないんですが、夫れが矢張(やつぱ)り私の心では、ホンの偶然(ぐうぜん)のやうには思へないんです。」正

音無は卓子(テーブル)の上に両肱(りやうひぢ)を突(つ)いてがつくりと顫(ふる)へてゐた。

ガラス使用

別13
60
3

「夫れから私は帰り途で、あの二軒茶屋（にけんぢゃや）の所で鳴野（なるの）さんに會（あ）ひました。俥（くるま）が三挺（さんちゃう）、前の俥には平野刑事（ひらのけいじ）、後（うしろ）の俥には宇田部長（うだぶちゃう）が乗つてゐました。俥が擦（す）れ違（ちが）つた時、私は「あ、鳴野（なるの）さん！」と声を掛（か）けたのですが、丁度（ちゃうど）降（お）り坂（さか）でしたから、此方（こちら）に振返（ふりかへ）つただけで…………」

「ええ？、あの鳴野君も？」音無（おとなし）が態（わざ）と元気（げんき）よく話しかけようとした時、チリン〳〵〳〵と鈴（りん）の音がして、玄関で「号外（がうぐわい）！」といふ声が聞えた。貞子（ていこ）も音無も思はず言合したやう

（神楽坂下山田製）

ガラス使用

別13
60
3

300

三百七十一頁

に玄関へ出て行つた。

「円（ま）先ア、あの中村さん達（たち）の……」

貞子（ていこ）は号外を握つたまゝ畳（たたみ）の上にぺたりと投（な）げられたやうに坐（すわ）つた。

……以下原稿紙八十四枚削除……